様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１３０５２

研究課題名（和文）琉球諸語における受動・使役・授受の記述的研究

研究課題名（英文）Descriptive study of the passive, causative and benefactive in Ryukyuans.

研究代表者
當山　奈那（TOHYAMA, Nana）

琉球大学・人文社会学部・准教授

研究者番号：９０７９２８５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、UNESCOに危機言語として認定された琉球諸語内の6つの主要な言語（奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語）の中の数地点を対象に、複数地点の地域方言について、面接調査、談話資料の分析に基づき、受動文、使役文、授受文の記述を行った。各方言のヴォイス体系を明らかにし、それぞれの記述に基づいた方言相互の比較対照を行うことで、琉球諸語全域のヴォイスの構造、文法形式、意味の発展の方向性を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、琉球諸語内の言語バラエティを前提とした、方言相互の共通性や創意性をふまえた方言個別の詳しい記述を行った。先行研究が少ない受動、使役、授受に関わる言語現象について研究を行ったため、新しい言語事実を発見できた。さらに、その言語事実について琉球諸語内の言語バラエティを根拠にした理論的説明を行うことができた。また、調査地点の中には、文法研究がほとんどされてこなかった地域もある。母語話者がいなくなった後もその方言を継承していくためには、できる限り詳しい文法記述を残すことが必要である。本研究は、危機言語の継承と再活性化および方言教育への寄与という地域社会に対する貢献にも繋がっていくものである。

研究成果の概要（英文）：This study is a study of regional dialects within six major Ryukyuan languages (Amami, Kunigami, Okinawan, Miyako, Yaeyama, and Yonaguni), which have been identified by UNESCO as endangered languages. I conducted interviews with these regional dialects. Based on the results and the analysis of the discourse materials, passive constructions, causative constructions, and benefactive constructions were described.
I was able to clarify the voice system of each dialect. Based on each grammatical description, we compared and contrasted the dialects with each other. Finally, the direction of development of structure, grammatical form, and meaning related to the voice in the Ryukyuan languages was also discussed.

研究分野：琉球語文法

キーワード：ヴォイス　使役　受動　授受　琉球諸語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現代日本語の研究では、これまで多くの研究の中で受動と使役がシテモラウ文を介しながら連続性をなしていることが指摘されてきた[1][2]。また、国外の研究では、受動と使役の接近についての分析が提案されている[3]。

シテモラウ文のような授受があらわす利益性を介して受動や使役をみていく研究は、琉球諸語を含め、これまでの方言研究では行われてこなかった。現代日本語と比較して特殊な形式や用法が注目される方言研究では、テーマとしてはとりあげられなかった側面があった。

２．研究の目的

本研究の目的は、UNESCO に危機言語として認定された琉球諸語内の 6 つの主要な言語（奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語）の中の数地点を対象に、複数地点の地域方言について、面接調査、談話資料の分析に基づき、受動文、使役文、授受文の記述を行い、各方言のヴォイス体系を明らかにし、それぞれの記述に基づいた方言相互の比較対照を行うことで、琉球諸語全域のヴォイスの構造、文法形式、意味の発展の方向性を考察することである。

３．研究の方法

UNESCO が危機言語に登録した奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の主要な 6 つの諸言語のうち、これまで申請者が調査した経験があり、話者との関係も構築されている集落でフィールド調査を実施した。調査項目は、受動文、使役文、授受文のヴォイスに関わる各構文について、自動詞受動文、間接受動文の構文の有無、使役動詞の派生の仕方、二重使役文の有無、授受動詞のシステムとシテモラウ、シテクレル相当形式の存在の有無、自他動詞の対応関係、自動詞構文と他動詞構文、再帰動詞と再帰構文、再帰動詞のヴォイス特徴、相互動詞と相互構文、相互動詞のヴォイス特徴等であった。

４．研究成果

ここでは、特に受動、使役、授受について取り上げる。

(1) 受動

直接受動文の「直接対象の主語受動文」「相手対象主語の受動文」「所有者主語の受動文」を作ることができる。しかし、間接受動文（第三者主語の受動文）を作ることができない言語が北琉球・南琉球のどちらにも存在する。与論や首里では、大正生まれ世代の話者には下記(1)(2)の例が許容されなかったのに対し、世代を下ると許容されていく。

①　アミヌ　プタン。（雨が降った。）[与論、自動詞文]

②　ワーチョー　アミナン　プラリタン。（私たちは雨に降られた。）[与論、第三者主語の受動文]

(2) 使役

琉球諸語内の使役形式は、「Ｉス形式のみを持つ」、「IIス形式とシム形式を持つ」、「IIIシム形式のみを持つ」のタイプがみられる。IIは、さらに、「IIa ス、シム、シミラス形式を持つ」タイプと「IIb ス、シム形式を持つ」タイプに分けることができる。いくつかの地点をとりあげてまとめると表１のとおりになる（表 1 の（✓)のように ()で示した箇所は、当該形式が痕跡的に確認できたことを示している。空白は、当該形式が確認できなかったことを表す。上の 5 地点が北琉球諸語で、下の 3 地点が南琉球諸語である）

表 1.　琉球諸語の使役形式のタイプ

		ス形式	シム形式	シミラス形式
喜界島大朝戸	I	✓	(✓)	
与論島	I	✓	(✓)	(✓)
伊平屋島	IIa	✓	✓	✓
今帰仁村謝名	IIa	✓	✓	✓
首里	IIa	✓	✓	✓

伊良部島	Ⅱb	✓	✓
多良間島	Ⅱb	✓	✓
与那国島	Ⅲ	(✓)	✓

Ⅰ～Ⅲのタイプの言語ごとに、二重使役文の有無と作り方の傾向について以下のとおり整理した。

○Ⅰのタイプはス形を重ねることで二重使役文の述語形式を作る。(num-as-as-un 飲む-CⅠ-CⅠ-IND　与論)
○Ⅱ-a のタイプはシミラス形式が二重使役文の専用形式となり、条件によってはシム形式が述語になる。　(num-asimiras-un 飲む-CⅢ-IND 首里)
○Ⅱ-b のタイプは二重使役文にシム形式を選好する。(num-ahimi:-n 飲む-CⅡ-IND 平安座)
○Ⅲのタイプはシム形式が二重使役文の述語になる。(kur-ami-ta-n 来る-CⅡ-PST-IND 与那国)

青木(2020)によれば、日本上代の使役は、述語動詞にシムを後接させた形式が主に用いられ、中古にス（サス）が取って代わるようになった。このことから、与那国のようなシム形式のみをもつタイプⅢと上代の使役は類似する。古典日本語とは異なり、琉球諸語では、シム形式がス形式に置き換わることがなく、Ⅱ-b の南琉球のように活用のタイプでス形式とシム形式を使い分ける言語が発生した。二重使役構文では、シム形式が積極的に用いられるようになり、北琉球の一部の地域では、Ⅱ-a のような二重使役形式のシミラス形式が専用の形式として用いられるようになった。奄美諸島の地域では、もともとス形とシム形（+シミラス形）が存在していたが、シム形（シミラス形）がス形に置き換わっていった可能性がある。

(3)　授受
琉球諸語の授受動詞には、本動詞として働くものと、補助動詞として働くものとがある。現代日本語の本動詞と補助動詞とが形式上、対応しているのに対して、琉球諸語は補助動詞に欠ける形式があるため、対応していない。琉球諸語内でも、与論のような奄美方言の場合、「もらう」に対応して「してもらう」に相当する補助動詞が存在しているが、与論以南の方言は「してもらう」に対応する形式を持たない。また、奄美を除けば、日本語の「くれる」に音韻的に対応する形（例：クィーン）を補助動詞に持つ地域と、動詞「取る」の使役動詞の形「取らす」に対応する形（例：トゥラスン）を補助動詞に持つ地域と、どちらも補助動詞に持つ地域とがある。
琉球諸語の授受動詞は、動作主体に対して、それから発する動作として関わるか、それにむかう動作として関わるかという動詞の語彙的な意味がもつ「方向性」の違いによって区別される。つまり、「対象が主体からとおざかっていくことをあらわす授受動詞（例 A)」は、動作主体に対して、遠心的な方向性をあらわすという語彙的な意味をもっており、「対象が主体のほうへちかづいてくることをあらわす授受動詞（例 B)」は、主語にさしだされる動作主体に対して、求心的な方向性をあらわすという語彙的な意味をもっている。
③ワンネー　’イキガングァンカイ　フン　クィタン。(私は息子に本をあげた。) [首里]
④ワンネー　ヤッチーカラ　フン　’イータン。(私は息子から本をもらった。) [首里]
また、琉球諸語の叙述文では、授受動詞の補助動詞用法というのは、実際には、あまり用いられない。ただし、命令形や意志形が述語になって、相手に動作の実行を頼む・お願いするというモーダルな意味を表現する文は現れやすい。

(4) 相関
琉球諸語の受動文と使役文は、利益性を介しながら連続性をなしている。首里方言などの沖縄諸方言（タイプⅡa）では、基本的には、使役のシム形式は述語になると、動作のきっかけが動作主体にあり、〈許可〉の意味を表す。また、シミラス形式は間接使役文の述語になるが、特定の条件下で、利益性を発現することがある。
南琉球でも、「してもらう」に相当する形式がない場合は、使役文（ス形式）を用いて表すことがある。そして、間接使役文の述語になり、動作の生じるきっかけが使役主体にあることを示すシミラス形式が述語にあらわれているにも関わらず、間接的な使役主体が存在せず、使役主体に動作の生じるきっかけがない出来事をあらわすと、主語の使役主体＝人が動作主体の動作の結果生じた不利益を被ることを表現することができ、それは「第三者主語の受動文」と類似する。
⑤ワッター　イキガングァガ　ウランクトゥ　ヨーシニ　ウグァンス　チガシミラチャン。(私達は男の子がいないので、養子に家を継がれた。直訳：継がせた。) [首里]

[引用文献] [1]佐藤里美(1986)「使役構造の文(1)」[2]早津恵美子(2016)『現代日本語の使役文』[3] Palmer、 F. R.、 1987、 The English Verb 2nd Edition. [4]青木博史（2020）「使役」青木・高山編『日本語文法史キーワード辞典』

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 當山奈那	４．巻 3
２．論文標題 伊是名村仲田方言の形容詞・名詞活用の資料	５．発行年 2022年
３．雑誌名 シマジマのしまくとぅば	６．最初と最後の頁 95-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 當山奈那	４．巻 2
２．論文標題 伊是名村諸方言の動詞の文法的な形式	５．発行年 2021年
３．雑誌名 シマジマのしまくとぅば	６．最初と最後の頁 59－82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 首里方言の副詞－琉球語音声データベースの用例から－
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 琉球諸語における二重使役構文の述語形式
３．学会等名 日本言語学会第164回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 琉球諸語の使役文
３．学会等名 令和3年度 第2回「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」オンライン研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 琉球諸語の自他動詞と他動性
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 當山　奈那，目差　尚太，大胡　太郎
２．発表標題 琉球諸語の使役文とシム相当形式について
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関